

## CURES Salon

『現代北朝鮮経済研究へのアプローチ』  
(金沢大学経済学部研究叢書第10号)を刊行して

龍 世 祥

今年の3月において、経済学部教授会の好意によって、王勝今教授（現在、中国・吉林大学北東アジア研究院院長）、藤田暁男教授（経済学部長）と私の3人による『現代北朝鮮経済研究へのアプローチ』が経済学部研究叢書第10号として刊行されることとなった。お二人の先生が大変お忙しいので、私が指名されてこの文章を書かせていただいた。

冷戦構造の崩壊した後、その遺産でもある朝鮮半島問題がどう解決していくか、そして、朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）がどう変わっていくかは、全世界から関心を集めている大きな問題となっている。他方では、各分野、特に経済に関する其の研究に必要な基礎資料が大変に不足な状態であるので、北朝鮮問題は「まだ謎だ」とよく言われるほど不透明な問題となっている。この意味において、この文章を書く場合、短文といってもこの重要な問題を回避できないので、私にとって極めて難しい仕事である。

6月2-5日に、国連北東アジア金沢国際シンポジウムが開かれた。私は藤田先生とともにそれぞれ中国と日本からの代表者としてこの会議に参加した。この会議においては、北朝鮮からの代表はいなかったが、北朝鮮の問題は当然のことながら、この会議の一つの焦点になった。特にその行方の問題については、代表達の議論は「悲観派」と「楽観派」に鮮明に分けられて対立すると同時に、それ

ぞれがまだ一つの見方で評価できなくなっており、多岐化している。

悲観論では、一番消極的なのは「自壊待ち」論である。それは、「自殺しようとする」機能装置も無ければ、「自救できる」機能装置もない「糞土の牆」のような北朝鮮の現行の体制に対して、「援助」を与えるのは、「硬直化した体制」に「生命維持装置」を付けることとなり、「非人道的」で、その「自壊」を待ちながら、自壊後の対応策を研究するほうが「現実的」であると強調している。これに対して、悲観的な「自壊待ち」論は、まだ革命的「伝統社会」に止まっている北朝鮮には、現代的な思想に基づく「援助」、「協力」などの努力を払ってもなかなか聞かないのも現状であり、放任して敵対行為が起これば北東アジア地域に爆発的な衝撃を及ぼすのも可能であると懸念し、我々の対策としては、その自らの変化を待つしかないと主張している。

楽観論では、この会議での多数派となるのは「軟着陸」論である。それは、北朝鮮の自らの転換が期待できないが、経済などの援助と協力を通してソフトランディングさせるのは唯一の現実的な選択肢であると力説している。それより北朝鮮を一番楽観的に判断している「推進的」な考え方はオーストラリアからの代表の意見であった。それによれば、北朝鮮は、90年代に入ってから自ら局部的、実験的な開放政策を積極的に取り始め、それな

りの成果を遂げたのが事実であり、これからも積極的な国際環境を作っていけば、中国のような改革・開放の道に沿っていくことが期待されると言うことであった。

そこで、我々の著書に示される見方は以上の考え方のどれに近いかは、その副サブタイトルと各章の内容によって明示されていることであろう。

最後であるが、北朝鮮の将来については、以上のような様々な議論があるほど論定できないと思われる。しかし、その国民、特にそ

の子供達が連年の水害によって飢饉の状態にあるのはすでに「謎」ではなく明らかにされている。自然の前で人類は一つしかない。純粋な人道的食糧支援は当面において国際社会の北朝鮮に対して緊急にとらなければならない唯一の対応策である。特に強調したいのは、周辺諸国の国家政府、政治社会がこのようなすべきことをやらねばならないが、少なくとも民間の援助活動の邪魔にならない姿勢を取るべきだということである。

## 地域経済文献情報

"Amano, Akihiro", "The Environment, Trade and Delopment"(総合政策研究(関西大院),1,1996,9-18)

"Bass, Steven J.", Research Park Development in Japan National Policy and the Nurturing of Local Initiative (学習院経研年報, 9, 1996, 5-13)

"Du, Jin", Reional Inequality Variations in Post-Reform China—Sources and Implications of Regional Income Disparities (北九州産社研紀要, 37, 1996, 19-41)

"Gottinger, Hans W.", Some Critical Topics of Environmental Economics (経営と経済(長崎大), 75(3/4), 1996, 41-75)

"Ikemoto, Yukiko", Expansion of Cottage Industry in Northeast Thailand—The Case of Triangular Pillows in Yasothorn Province (東南ア研究(京大), 33(4), 1996, 122-137)

"Kawashima, Tatsuhiko; Hiraoka Noriyuki", ROXY-index Analysis on the Spatial-cycle Path for Six Spatial System in Japan (経済論集(学習院), 32(4), 1995, 201-255)

"Kozu, Hiroyoshi", Optimum Level of Development in a Residential Area (愛知経営論集, 133, 1995, 167-176)

"Salamitou, J.", 欧州における環境管理システム(EMS)(化学経済, 43(3), 1996, 11-15)

Schaar, Hans-Wolfgang; 清水千弘訳, ドイツ連邦共和国の大都市における住宅地の価格(1993年)——ドイツにおける土地市場の動向を中心として(不動産研究, 37(4), 1995, 44-60)

"Tsubouchi, Yoshihiro", "A Malay Village in Kelantan, 1970-1991"(東南ア研究(京大), 33(3), 1995, 3-20)

\*アーバンハウジング編, 農と住の共生—エコ・タウンの実現をめざして(農住市街地形成に関する調査研究会報告書)(アーバンハウジング, 1996/9, 184)

相茶 正彦, 岩崎 義一他, 新産・工特地区における盛衰の著しい産業の生産活動特性からみた工業構造の転換・高度化の実態に関する研究(都市計画, 199, 1996, 100-111)

浅井 修平, 企業経営動向調査(北陸経済研究(北陸経済研究所), 218, 1996/8, 1-10)

安積 紀雄, 小牧市における営業倉庫の機能について(人文地理学研究(筑波大), 20, 1996, 199-211)

朝田 康伯, 戦後日本の地域間人口移動——地域間所得格差による経済分析(経済研究(阪府大), 41(2), 1996, 93-125)

荒尾 正, 交通における危機管理(運輸と経済, 56(4), 1996, 44-50)

荒川 祐吉, 地域開発の組織論的考察——政治経済パラダイムによるマクロ・マーケティング的接近(中小企業季報(大経大), 1, 1996, 1-8)

淡路 剛久, 宇都宮深志他, 環境問題の課題と展望(特集)(都市問題研究, 48(6), 1996, 3-144)

安藤 良輔, 青島縮太郎他, 一日交通時間からみた地域の交通・活動関連分析(地域学研究, 25(1), 1995, 187-198)

安保 一郎, 秋田県産業の活性化と人材育成について(経済研究季報(秋経大), 24, 1996, 1-10)

許 文九, 韓国における地域間所得格差の動向——域内総生産(GRDP)の観点から(経済研究(阪府大), 41(1), 1995, 133-170)

飯島 孝, 岡本 達明, 水俣病原因工場の産業史・技術史